

差し押さえの紙が玄関に貼られたのは、三日前のことだった。

赤い封蝋の押された王宮の通達を、父は震える手で何度も読み返していた。母は奥の部屋で泣いていて、その声を弟妹に聞かせまいと、私は二人を裏庭へ連れ出して、欠けた木の実を拾わせていた。秋も終わりがけて、アシュリー男爵領の畑には実るものがほとんど残っていない。先代――祖父の代から積み上がった負債と、二年続いた凶作が、私たちの家を静かに、けれど確実に呑み込もうとしていた。

貴族とは名ばかりだ。屋根の修繕すらままならず、使用人はとうに暇を出した。残された財産といえば、傾いた屋敷と、痩せた土地と、それから――娘である私くらいのものであった。

その私のところへ、思いもよらない話が舞い込んだのが、昨日の夕刻のことだ。

「リーゼロッテ。座りなさい」

居間に呼ばれて、私は両親と向き合った。テーブルの上には、また別の――けれど今度は赤ではなく、深い藍の封蝋を押した書状が置かれていた。父の顔は青ざめ、けれどどこか、すぎるような光を宿していた。

「宰相閣下から……縁談が来た」

一瞬、言葉の意味が頭に入ってこなかった。

宰相。ヴィルフリート・グレイ。王国の政を一手に担う大魔導士で、その名を口にするだけで人々が声をひそめる、あの。

「お前を、妻に望んでおられる。引き換えに――我が家の負債を、すべて肩代わりすると」

母が顔を覆った。父は言葉を継ぐのに、ひどく時間をかけた。

「断れば、来月には差し押さえた。お前の弟と妹も、路頭に迷う。だが……」

だが、と父は言い淀んだ。その先に続く噂を、私だって知っていた。社交界に出たこともない私ですら、耳にしたことのある悪評。

「氷結の宰相」。

人を寄せ付けず、屋敷に近づいた者が凍りついて動けなくなったという。補佐官が次々と辞めていき、もう誰も彼に仕えたがらないという。感情というものを持たない、氷の心を持つ男だと。その邸宅の周りには、真夏でも霜が降りるのだと――尾ひれのついた話なら、いくらでも転がっていた。そんな男が、なぜ私を。

社交界の華でもなければ、評判の美姫でもない。地味で目立たず、片隅で壁の染みを数えているのがお似合いの、そんな娘を。

その問いが喉までせり上がってきて、けれど私はそれを呑み込んだ。

居間の隅で、弟のニコが眠そうに目をこすっている。まだ六つの妹の工

ルが、母のスカートの裾を不安げに握りしめている。あの子たちの行く先を思えば、問いの答えなど、どうでもよかった。

「……お受けします」

声は、自分でも驚くほど静かに出た。

母が顔を上げて、何か言いかけた。父は唇を噛んで、目を伏せた。許してくれ、と聞こえたような気がしたけれど、確かめはしなかった。確かめてしまえば、二人とも崩れてしまう。だから私は、できるだけ穏やかに微笑んでみせた。

「心配なさないで。宰相閣下のお屋敷なら、きっと不自由なく暮らせます。手紙も書きますわ」

嘘だった。あの噂の屋敷で、不自由なく暮らせる保証などどこにもない。けれどこの場では、その嘘こそが重要なのだと、私にはわかっていた。

父が、ようやく顔を上げた。痩せて皺の増えたその頬を、一筋、光るものが伝っていた。私が物心ついてから、父の涙を見たのは初めてだった。それを見なかったことにして、私は静かに席を立った。

その夜、私は自分の部屋で、嫁入りの荷をまとめ始めた。

まとめるといっても、持っていくものはほとんどない。色褪せたドレスが数着、母から譲られた古い髪留め、それから読み古した本が幾冊か。寝台に並べてみれば、十八年生きてきた証としては、あまりに慎ましいものだった。

窓の外では、痩せた月が雲に隠れたり、また顔を出したりを繰り返している。その光をぼんやり眺めながら、私は明日からの暮らしを思おうとして、けれど何ひとつ像を結べなかった。氷の宰相とは、どんな人なのだろう

う。本当に心を持たない男なのだろうか。私は、その男に触れられるのだろうか。妻として——そういうことを、求められるのだろうか。

考えると、指先が冷たくなった。

怖くないと言えば、嘘になる。閨のことなど、母から断片的に聞かされた知識しかない。見知らぬ男に身を委ねるといふ、その想像だけで、胸の奥が縮こまるようだった。けれど不思議と、絶望はしていなかった。私にはずっと、自分は何の役にも立たない人間だという思いがあったからだ。

器量がいいわけでも、気の利いた話ができるわけでもない。剣も魔法も得意ではない。私の魔力ときたら、量こそ人並みにあるものの、何かを生み出すでもなく、ただ淡く揺らいでいるばかりで、術師の教師にさえ匙を投げられた。役立たずの体質だと、自分でもそう思ってた。生きてきた。

そんな私が、この身ひとつで家族を救えるのなら——それはむしろ、生

まれて初めて与えられた、まともな役目なのかもしれない。

売られる娘。

そう呼ばれても仕方のない立場だ。けれど、と私は思う。売られること
でしか守れないものがあるのなら、私は喜んで売られよう。少なくとも、
ニコとエルが温かい寝床で眠れるのなら、それでいい。

荷物の最後に、私は弟妹の描いた拙い絵を一枚、そっと忍ばせた。色のは
み出した、家族五人の絵だった。これだけは、どんな立派な屋敷へ行こ
うと手放すまい、と心に決めた。窓辺に頬杖をついて、私は遠い北の空を
見やった。あの空の下のだこかに、これから私の主となる人がいる。会っ
たこともない、声も知らない、氷の異名を持つ男が。

翌朝、迎えの馬車が来た。

黒塗りの、見たこともないほど立派な馬車だった。車体には霜の結晶を象ったような銀の紋章が刻まれていて、それを見た瞬間、これが本当に氷の宰相の使いなのだと、胸の奥が冷たく締めつけられた。御者は無言で、紋章を冠した扉を開けた。馬の吐く息が、白く凍って宙に流れていく。よく晴れた朝だというのに、馬車のまわりだけ、空気がひやりと張りつめているような気がした。

母は最後まで泣いていて、父は何度も頭を下げた。ニコとエルは、何が起きているのかわからないまま、それでも別れだということだけは感じ取って、私の脚にしがみついて離れなかった。

その小さな手を、私はそつとほどいた。

「いい子にしていね。お姉ちゃんは、大丈夫だから」

エルが、ぐずぐずと涙をすすりながら、何度も頷いた。ニコは涙をこら

えようと唇を引き結んでいて、その顔がいじらしくて、私はもう少しで決意を崩しそうになった。膝をついて二人を抱き寄せ、それぞれの額に唇を落とす。痩せた肩の、小さな温もりが、いつまでも手のひらに残った。

馬車に乗り込むと、扉が重い音を立てて閉じた。

窓越しに見える家族の姿が、少しずつ遠ざかっていく。傾いた屋根が、痩せた畑が、私の生まれ育った景色のすべてが、後ろへと流れて消えていく。母が手を振っている。その手が、霞んで見えなくなるまで、私はそれを見つめ続けた。

涙は、出なかった。泣いてしまえば、決意が揺らいでしまう気がしたからだ。

車輪が街道を打つ音だけが、規則正しく響いていた。

なぜ、私だったのか。

その問いだけが、答えを得られないまま、胸の奥ですっと小さく鳴っていた。氷結の宰相が、数多いる令嬢の中から、どうして名もなき私を選んだのか。借金を肩代わりしてまで、私に何を求めているのか。器量でも家柄でもないのなら、いったい私の何を。

知る由もなかった。

ただ私は、これから始まる暮らしのなかで、その答えを少しずつ知っていくことになる。それが、私という人間の価値を――役立たずと信じて疑わなかった、この身の価値を、根底から覆すものだということも、まだ何ひとつ知らないまま。

馬車は北へ、北へと進んでいく。

王都のさらに先、人里離れた地に建つという、氷の館へ向かって。窓の外景色は、進むにつれて少しずつ色を失っていった。やがて街道の脇に

は、季節外れの白い霜が、点々と降り始めていた。馬車が北へ進むほどに、その霜は厚みを増し、木々の枝は薄く凍りつき、行き交う人の姿も絶えていく。世界そのものが、ゆっくりと色と温度を失っていくようだった。

馬車に揺られながら、私はふと、なぜこんなにも落ち着いていられるのだろうか、自分でも不思議に思った。

普通の娘なら、見知らぬ男のもとへ売られていくのだ、声を上げて泣いてもいい場面だろう。けれど私の心は、凍りついた湖のように静かだった。あるいはそれは、もうずっと前から、自分の身などどうなってもいいと、心のどこかで諦めていたからかもしれない。

幼い頃から、私は家のなかでいちばん目立たない子どもだった。兄や姉がいれば違ったのかもしれないが、私が長女で、下に幼い弟妹がいる。手のかかる子どもたちと、傾いていく家計のあいだで、両親はいつも疲れき

っていて、私が静かにしていることだけが、せめてもの親孝行だった。だから私は、自分の望みを口にしないことを覚えた。欲しいものをねだらず、行きたい場所を言わず、ただ与えられた役目を黙々とこなす。それが私の生き方になった。

魔力の才がないと教師に告げられたときも、私はそれほど落ち込まなかった。やはり、と思ったただけだ。何の取り柄もない自分には、ふさわしい結末だと。

けれど今、馬車の窓に映る自分の顔を見ながら、私は思う。取り柄のないこの身が、初めて何かの役に立とうとしている。家族を救うという、確かな役目を背負って。それは奇妙なほど、私の心を風がせていた。

御者は一言も口をきかなかった。途中の宿で馬を替えるときも、必要なこと以外は何も言わない。氷の宰相に仕える者は、皆こうなのだろうか。

それとも、近づく者を凍らせるという主のもとで、言葉を惜しむ癖がついてしまったのだろうか。

私は膝の上で両手を握りしめ、これから始まる暮らしへ、ただ静かに身を委ねていった。

馬車が止まったのは、日が暮れかけた頃だった。

御者が扉を開けるより先に、私は窓の外に広がる光景に息を呑んでいた。屋敷というより、城だった。灰色の石を積み上げた巨大な建物が、痩せた森を背にして、ひっそりと聳えている。尖塔の先には、季節を無視した白い霜が降り、窓という窓は固く閉ざされていた。庭の植え込みは枯れ、噴水の水は凍りついたまま、半ばで止まっている。生き物の気配というもの、まるでなかった。

ここが、氷の館。

馬車を降りると、足元の砂利が薄く凍っていて、踏むたびに小さく軋んだ。吐く息が白い。秋のはずなのに、ここだけが冬だった。私は外套の襟を引き寄せ、ひとつ深く息を吸ってから、玄関へと続く石段を上っていった。

扉は、私が手を触れるより先に、内側から音もなく開いた。

出迎えたのは、年配の女性がひとりきりだった。痩せて背筋の伸びた、銀髪の家政婦だ。

「お待ちしておりました、奥様。グレタと申します」

奥様、という呼び名に、私の肩がわずかに強張った。まだ実感のない言葉だった。グレタは表情を変えず、けれど刺々しさもなく、淡々と私を屋敷のなかへと導いた。広間は天井が高く、足音がやけに響く。壁には肖像

画ひとつ掛かっておらず、暖炉には火の入った形跡もない。豪華なはずの調度品が、すべて冷たく沈黙していた。

歩きながら、私はそれとなく屋敷のなかを見回した。長い廊下のあちこちに、白い霜が薄く張りついている。窓ガラスには、内側から凍りついた水滴の跡。磨き上げられた床は冷たく光を弾き、私の足音だけが、どこまでも反響していった。立派な屋敷だ。けれど、ここには温度がなかった。人の暮らす場所が当然に持っているはずの、ぬくもりというものが、根こそぎ抜き取られているようだった。

「旦那様は、書斎におられます。すぐにお会いになりますか」
会いたくない、と言えるはずもなかった。私は頷いた。

通された一室で、彼は窓辺に立っていた。

逆光のなかで振り返ったその姿を見た瞬間、私は言葉を失った。

噂は、半分だけ正しかった。氷の宰相は——美しかった。噂以上に。銀に近い淡い金の髪、整いすぎて作り物めいた顔立ち、そして何より、こちらを射貫く双眸が、凍った湖の底のような、深く冷たい青をしていた。だが、その美しさは人を惹きつけるものではなかった。近づくな、と全身で告げているような、拒絶の美しさだった。

彼は私を一瞥すると、感情のない声で言った。

「リーゼロッテ・アシュリーか」

「は、はい」

「ヴィルフリート・グレイだ。今日から、君の夫ということになる」

ということになる、という言い方に、私は胸の奥がわずかに冷えるのを感じた。彼は私のほうへゆっくりと歩み寄り、けれど決して触れられるほ

どの距離までは詰めずに、立ち止まった。

「先に言っておく。これは契約だ。愛も情も求めるな。君には果たすべき役目がある。それを果たしてくれさえすれば、君の家の負債は消え、家族は守られる。それ以上のことは、互いに何も期待しない。いいな」

言葉は刃のように鋭く、けれど不思議と、私を傷つけるためのものではないように聞こえた。むしろ、私を遠ざけることで、何かから守ろうとしているような——そんな響きが、ほんの一瞬、青い瞳の奥をよぎった気がした。気のせいかもしれない。

「……承知しております」

私は深く頭を下げた。

「役目とは、何でしょうか。私にできることでしたら、何なりと」
彼は答えなかった。ただ私を見つめ、そして視線を逸らした。

「いずれ、わかる。今は知らなくていい」

その横顔には、説明することそのものを拒むような、頑なな影が落ちていた。私はそれ以上、問うことができなかった。

部屋を辞して廊下に出ると、背中にまだ、あの青い視線の冷たさが残っているようだった。けれど同時に、私はひとつ、奇妙なことに気づいていた。彼のそばに立っていたあいだ、屋敷を満たすあの冷気が、ほんのわずかに、和らいだような気がしたのだ。気のせいだろう。そう思って、私は深く考えることをやめた。考えたところで、何ひとつわからないのだから。

婚礼は、その夜のうちに、形ばかりに行われた。

立会人は、屋敷に出入りする神官がひとりと、家政婦のグレタだけ。誓いの言葉も、指輪の交換も、すべてが事務的に淡々と進んでいった。ヴィ

ルフリートは終始無表情で、私の指に冷たい銀の指輪をはめるとき、その指先が触れた一瞬だけ、彼の動きがほんのわずかに止まったように見えた。けれどそれも、すぐに何事もなかったように流れていった。

私の婚礼。十八年生きてきて、いつかは訪れると漠然と思い描いていた日。それは、火の気のない広間で、見知らぬ三人に見守られながら、凍えるように静かに過ぎていった。

花嫁衣装は、屋敷に用意されていた。仕立てのいい、けれど装飾を削ぎ落とした白いドレスだった。鏡に映る自分は、まるで他人のようだった。

初夜の寝室へ通されたのは、夜も更けてからだだった。

広い寝台の上で、私は身を硬くして座っていた。母から断片的に聞かされた知識が、頭のなかをぐるぐると回っている。これから、何をされるの

か。痛いのだろうか。怖い、という気持ちと、役目を果たさねば、という気持ち、胸のなかでせめぎ合っていた。

扉が開いて、ヴィルフリートが入ってきた。

彼は寝台のそばまで来ると、私を見下ろした。その視線が、私の硬い肩から、握りしめた手元へと移っていく。私は思わず、ぎゅっと目を閉じた。けれど、いつまで経っても、何も起こらなかった。

おそろおそろ目を開けると、彼はもう背を向けていた。

「今夜は何もしない。眠れ」

「……え」

「明日からは、別の部屋を用意させる。君はそこで暮らせばいい。役目が必要になったときだけ、呼ぶ」

彼はそれだけ言うと、振り返りもせずに部屋を出ていった。扉が静かに

閉まる。

残されたのは、広すぎる寝台と、私ひとりだった。

ほっとした――はずだった。怖いことをされずに済んだのだから。けれど、なぜだろう。彼の背中が扉の向こうに消えた瞬間、胸のどこかが、ちりりと痛んだ。安堵と、それから、説明のつかない寂しさが、ないまぜになって押し寄せてきた。

拒まれた、と感じてしまった自分が、私には不思議だった。望んでこの結婚を受け入れたわけではない。触れられずに済んだのなら、それでいいはずなのに。

私はそっと、左手の薬指にはまった銀の指輪に触れた。冷たい金属が、私の体温で少しずつ温まってく。けれど、それを贈ってくれた人の心は、きっと、この指輪よりもずっと冷たく凍りついているのだろう。

窓の外では、屋敷を取り巻く霜が、月の光を受けて青白く光っていた。

翌朝から、私の奇妙な新生活が始まった。

屋敷は驚くほど静かだった。使用人はグレタを含めてもごく僅かで、皆、必要なこと以外は口を開かない。ヴィルフリートは早朝に登城し、深夜にならなければ戻らない。顔を合わせることは、ほとんどなかった。食事はいつもひとりで、広い食堂の片隅で、温かいはずの料理を、温かいと感じる前に飲み込むようにして食べた。

与えられた部屋は、客間として申し分なく整えられていたけれど、やはり火の気がなく、私は厚手のショールを手放せなかった。グレタに頼めば暖炉に火を入れてくれたが、不思議なことに、火を焚いても部屋はなかなか暖まらなかった。

することがないわけではなかった。グレタは私が屋敷の采配に口を出すことを嫌がらなかったし、私もかつて貧しい家計をやりくりしてきた身だ。布の繕い物をし、僅かな使用人の食事に気を配り、埃をかぶった書庫の本を少しずつ整理した。手を動かしていれば、余計なことを考えずに済んだ。けれど、ふとした拍子に、心が空白になる瞬間があった。窓の外の凍りついた庭を眺めているとき。長い廊下にひとり立ち尽くしたとき。そんなとき決まって、私の頭に浮かぶのは、あの人の横顔だった。説明すること拒むような、頑なな影を落とした、あの青い瞳。彼は何をそんなに、頑なに守っているのだろう。

「この屋敷は、いつもこんなに寒いのですか」

ある日、私は思いきってグレタに尋ねた。

グレタは少し間を置いて、それから静かに答えた。

「旦那様がいらっしやるところは、いつもこうでございます。お気になさ
いませんように」

それ以上は、何も語らなかつた。けれどその言葉は、屋敷の寒さが偶然
のものではなく、ヴィルフリートその人に由来するものなのだと、暗に告
げているようだった。

彼は何者なのだろう。なぜ、これほどの冷気を纏っているのだろう。そ
して、私に課せられた役目とは、いったい何なのだろう。

問いは増えるばかりで、答えはひとつも得られなかつた。

眠れない夜は、決まって窓辺に立った。

厚いカーテンの隙間から外を覗くと、屋敷を取り巻く森も、枯れた庭も、
すべてが青白い霜に覆われて、月光のなかで静かに凍りついている。美し
い、と思った。けれど、人を寄せ付けない美しさだった。あの人の双眸と、

同じ色をした美しさ。

私はときどき、想像してみるものがあつた。この冷氣の奥に、本当はどんな人がいるのだろう、と。氷の宰相、感情を持たぬ男——そう呼ばれる彼にも、笑つた日があつたのだろうか。誰かに心を許した夜が、あつたのだろうか。考えても詮ないことだ。私はただの契約の妻で、役目を果たすためだけにここへ来た。彼の心の奥になど、踏み込む資格はない。

それでも、と私は思つてしまふ。これほど深い冷たさを纏うには、よほどの理由があるはずだ。人は、生まれつき凍りついてなどいない。

夜、寝台に横たわつて、私は天井をぼんやりと見上げた。家族は今頃、温かい寢床で眠っているだろうか。私が嫁いだことで、あの子たちが少しでも安心して暮らせているのなら、それでいい。そう自分に言い聞かせながら、私は冷たいシーツのなかで、ひとり身を縮めた。

氷の館での日々は、こうして、凍えるように静かに過ぎていった。

その静けさが、ある夜、突然砕け散ることになるとは——このときの私は、まだ知らなかった。

その夜、私は物音で目を覚ました。

最初は、風の音だと思った。けれど違った。屋敷そのものが、低く、苦しげに軋んでいた。木材が、石が、悲鳴を上げるように鳴っている。寝台から身を起こすと、部屋の空気がいつにも増して刺すように冷たい。吐く息が、闇のなかで白く凍る。

窓のほうを見て、私は息を呑んだ。

硝子に、見る間に霜が広がっていく。中心から枝を伸ばすように、白い結晶が、ぴしり、ぴしりと音を立てて凍りついていく。まるで生き物のよ

うだった。何かが、おかしい。

廊下へ出ると、異変はもつとはつきりしていた。窓という窓が、一斉に内側から凍りついている。壁に手をつけば、指先が貼りつきそうなほど冷たい。屋敷全体が、巨大な氷の檻に変わろうとしていた。

遠くで、低い呻き声が聞こえた。

人の声だ。苦しんでいる。

私は迷わなかった。寝衣の上にシヨールを羽織っただけの姿で、声のするほうへ駆け出していた。理屈ではなかった。誰かが苦しんでいる――それだけで、足が勝手に動いていた。

声を辿って辿り着いたのは、屋敷の奥にある書斎だった。半ば開いた扉の隙間から、青白い光が漏れている。

書斎へ近づくにつれ、空気はますます張りつめていった。一步進むごとに、肌を刺す冷気が増していく。睫毛にまで霜が降りそうだった。それでも私は足を止めなかった。あの呻き声が、苦しげに、途切れ途切れに響いてくる。あの声の主が、ヴィルフリートだということを、私はもう疑わなかった。

「ヴィルフリート様……？」

扉を押し開けて、私はその場に凍りついた。

書斎のなかは、地獄絵図だった。

机が、椅子が、床が、天井までもが、見る間に氷に覆われていく。書棚から零れ落ちた本が、宙に浮いた水滴ごと凍りついて、空中で静止している。そして、その中心に――彼がいた。

ヴィルフリートが、床に片膝をつき、自らの胸を掻きむしるようにして、

苦悶していた。その身体から、青白い光が、制御を失った魔力が、荒れ狂う嵐のように噴き上がっている。光の粒子が、触れるものすべてを凍らせ、灼き、軋ませていた。彼の整った顔は苦痛に歪み、額には脂汗が滲み、いつもの冷たい仮面など、どこにもなかった。

光が、波のように脈打っていた。噴き上がるたびに、書斎のものが次々と凍りつき、あるいは逆に、別の場所では青い炎のような熱を帯びて軋んでいる。凍結と灼熱が、彼の体内で同時に荒れ狂っているのだ。机の天板に、ぴしりと亀裂が走った。窓硝子が、内側から押されるように、みしめしと撓んでいる。このままでは、屋敷ごと砕けてしまう。そう思わせるほどの、凄まじい力だった。

その渦の中心で、彼は獣のように喉を鳴らし、必死に何かを抑え込もうとしていた。けれど抑えれば抑えるほど、漏れ出す光は激しさを増してい

くようだった。彼自身が、自らの力に灼かれ、凍えているのだ。

「来る、な……っ」

私に気づいた彼が、喉を絞るようにして吐き捨てた。

「近づくな……巻き込まれる、ぞ……っ。今すぐ、出て、いけ……!」

その声には、明らかな恐怖が滲んでいた。私を傷つけることへの、恐怖が。

逃げるべきだった。彼の言う通り、ここにいれば私も凍りついてしまうかもしれない。頭ではわかっていて、けれど、足は止まらなかった。

苦しんでいる人を、見捨てられなかった。ただ、それだけだった。

「失礼します」

私は氷の張った床を踏みしめ、噴き上がる光のなかへ、まっすぐに歩み寄った。彼の伸ばした手が、止めようとするように宙を搔く。けれど私は

構わず膝をつき、その震える手を、両手で包み込んだ。

光の粒子が、私の腕に降りかかってくる。けれど、不思議と痛みはなかった。冷たくも、熱くもない。私の肌に触れた光は、まるで吸い込まれるように、すうっと消えていく。

その瞬間だった。

荒れ狂っていた光が、ふっと、凪いだ。

嵐のように噴き上がっていた魔力が、私の手のひらに触れたところから、まるで水が地に染み込むように、すうっと鎮まっていく。空中で凍りついていた水滴が、ぱらぱらと床に落ちた。軋んでいた屋敷が、静寂を取り戻していく。

私の手のなかで、彼の手から力が抜けていった。

ヴィルフリートが、信じられないものを見るように、私を見つめていた。あの凍った湖のような青い瞳が、大きく見開かれている。荒い呼吸を繰り返しながら、彼は掠れた声で言った。

「……お前」

その指が、私の手のひらを、確かめるように握り返してきた。

「凧、か」

「なぎ……？」

聞き慣れない言葉だった。私が問い返すと、彼はしばらく無言で私を見つめ、それから、ゆっくりと身を起こした。さっきまでの苦悶が嘘のように、彼の呼吸は整いつつあった。けれど、その表情には、これまで見たことのない、複雑な色が浮かんでいた。安堵と、驚きと、それから——何か、もっと深いもの。

氷の床に膝をつき、彼の手を握ったまま、私は彼の顔を間近に見た。脂汗の浮いた額に、銀の前髪が乱れて貼りついている。苦痛にひそめられた眉。喘ぐように開いた唇。いつもの作り物めいた冷たさが剥がれ落ちた、生身の彼の顔だった。

胸の奥が、ぎゅっと締めつけられた。これが、人を寄せ付けぬ氷の宰相の、本当の姿なのか。誰にも見せず、たったひとりで、この苦痛と闘い続けてきたのか。

彼が、ふいに視線を上げて、私と目を合わせた。間近で見る青い瞳は、月光を映して、凍った湖の底に沈んだ星のように、かすかに光っていた。

「百年に数人しか生まれない、稀有な体質だ」

彼は、私の手を握ったまま、静かに語り始めた。

「過剰な魔力を吸い取り、大地へ逃がし、風がせる力。俺の魔力は……生

まれつき、規格外に多い。常に体内から溢れ出ようとして、抑えきれずに、ああして暴走する。これまで、それを鎮められる者は、誰一人いなかった」彼の指に、ふたたび力がこもった。

「だが、お前は鎮めた。触れただけで。これが――お前を娶った、本当の理由だ」

その言葉が、私のなかに、ゆっくりと落ちていった。役目の正体。私に課せられた、たったひとつの務め。

私は――この人の、暴走する魔力を鎮めるための、いわば道具として、ここへ連れてこられたのだ。器量でも家柄でもなく、ただこの、自分では役立たずだと信じてきた体質のために。

不思議と、傷つきはしなかった。むしろ、腑に落ちたような感覚があった。何の取り柄もないと思ってきた私の身に、こんな力があったのか。そ

れが、この苦しむ人を救えるのか。

考えてみれば、すべての辻褄が合った。なぜ、社交界とも縁のない私が選ばれたのか。なぜ、借金を肩代わりしてまで娶られたのか。器量でも、家柄でもない。あの教師にさえ匙を投げられた、淡く揺らぐばかりの私の魔力——それこそが、彼の探し求めていたものだったのだ。

私はずっと、自分の体質を恥じてきた。何も生み出せない、何の役にも立たない力だと。けれど今、その力が、この苦しむ人を救っている。私の手のなかで、嵐のような暴走が、嘘のように凧いでいる。

「……私で、お役に立てるのですか」

声が、自分でも驚くほど穏やかに出た。

ヴィルフリートは、私を見つめた。その青い瞳の奥が、わずかに揺れた。

「肌の接触で、効率が跳ね上がる」

彼は、言いにくそうに、けれど誤魔化さずに告げた。

「深く……交われれば交わるほど、魔力は深く接地し、安定する。今夜のよ
うな暴走を、防げる。だから——」

彼は言葉を切った。私の手を握る指が、わずかに震えていた。氷の宰相
と恐れられるこの人が、こんなにも言いにくそうにしている。それが、な
ぜか、私の胸を締めつけた。

「今夜、それが必要だ」

彼の声は、命令ではなかった。懇願でもなかった。ただ、抑え込んだ何
かを、必死に押し殺したような、そんな声だった。

「強いるつもりはない。嫌なら——」

「いいえ」

私は、彼の言葉を遮った。

怖くないと言えば、嘘になる。けれど、この人を救えるのが、私だけだというのなら。役立たずの私が、生まれて初めて、誰かにとって必要な存在になれるというのなら。

「私が、します。それが、私の役目なら」

彼の顔に、はっきりとした驚きが走った。まさか、こんなにあっさり受け入れられるとは思っていなかったのだろう。きっと彼は、嫌悪されることを、拒まれることを、覚悟していたのだ。氷の宰相が、たったひとり、この冷たい屋敷で。

その顔を見て、私はかえって落ち着いた。この人は、人を凍らせる怪物などではない。誰かを傷つけることを誰よりも恐れ、だからこそ自らを氷で閉ざしてきた、ただ孤独な人なのだ。それが、触れた手のひらから、なぜか伝わってくる気がした。

窓の外の霜が、月光を受けて、まだ青白く光っていた。けれど、もう屋敷は軋んでいなかった。

彼はしばらく、私の覚悟を測るように、じっと顔を見つめていた。私が目を逸らさずに見返すと、その喉が、ごくりと小さく動いた。

「……後悔するなよ」

絞り出すような声だった。それは、私を脅すための言葉ではなかった。むしろ、自分自身に言い聞かせているような、そんな響きがあった。これから自分のすることに、踏み出すことを恐れているのは、彼のほうなのかもしれない。そう思った。

彼の手が、私の手を握ったまま、ゆっくりと立ち上がった。導かれるように、私も腰を上げる。汗ばんだ彼の手のひらの熱が、私の冷えた指に、じんわりと移ってくる。氷の宰相と呼ばれる人の体温が、こんなにも温か

いということを、私はこのとき初めて知った。

彼の手を握り返しながら、私は静かに、覚悟を決めた。

彼の寝室は、屋敷のほかのどこよりも静かだった。

燭台に灯された蝋燭が、数えるほど。揺れる炎が、広い部屋の輪郭をぼんやりと照らしている。寝台は天蓋のついた立派なもので、その上に腰を下ろした私の手は、自分でもわかるほど、小刻みに震えていた。

心臓が、痛いほど高鳴っていた。これから、この人と——そういうことをするのだ。義務として。役目として。母から断片的に聞いた、男女のあいだに起こることが、いよいよ現実になる。怖い。けれど、それと同じくらい、奇妙な昂ぶりが、胸の奥でくすぶっていた。私が、この人を救えるのだ。私の身体が、この人の苦痛を鎮めるのだと思うと、震える指先にも、

わずかな力が戻ってくるようだった。

ヴィルフリートは、後ろ手に扉を閉めると、こちらへ歩み寄ってきた。書斎での苦悶はもう鎮まっていたけれど、その肌にはまだ、わずかに青白い魔力の名残が、ちらちらと宿っている。彼は寝台の縁に腰を下ろし、私の顔を覗き込んだ。

「震えている」

「……っ、平気、です」

「無理をするな」

彼の指が、私の頬にそっと触れた。冷たいのかと思った指先は、意外なほど熱を持っていて、私はびくりと肩を跳ねさせた。彼はその反応を見て、少しだけ動きを止め、それからゆっくりと、私の頬の輪郭を辿り始めた。

指の腹が、頬から顎へ、耳の下へと、確かめるように滑っていく。爪を

立てるでもなく、ただ皮膚の表面をなぞるだけの、ごく軽い触れ方だった。それなのに、触れられた場所から、じんわりとした熱が灯っていく。

「ん……っ」

思わず声が漏れて、私は慌てて唇を噛んだ。

ヴィルフリートの指が、私の唇に移った。下唇を、親指の腹で、そうつと押し開く。

「噛むな。声を、殺すな」

その低い囁きが、耳の奥を痺れさせた。

彼の唇が、私の耳のすぐ下に寄せられた。熱い吐息が、首筋にかかる。

「あ……っ」

ぞくり♡と肌が粟立った。彼は、耳の下のやわらかな肌に、そっと唇を

押しつけ、舌先で、ぬるっ♡とそこを舐めた。生温かい舌の感触が、首筋を這い上がってくる。耳朶を、甘く食まれて、私は思わず首を竦めた。

「んっ、ん……っ、あ……」

くすぐったいような、けれどそれだけではない、痺れるような疼きが、耳から背筋へと流れ落ちていく。彼の指は、その間も、私の頬から首筋を、ゆっくりと撫で続けていた。

彼の唇が、重なってきた。

最初は、触れるだけの、ごく淡い口づけだった。けれどすぐに、彼の舌が私の唇を割って、口腔へと忍び込んでくる。ぬるり♡とした感触に、背筋がぞくり♡と震えた。彼の舌が、私の舌をやさしく搦め捕り、ちゅく♡ちゅく♡と音を立てて吸い上げる。逃げようとする舌先を追いかけて、絡みつき、擦り合わせ、くちゅ♡ぬちゅ♡と唾液が混じり合う。

「ふ……う、ん……っ」

息の継ぎ方がわからず、私は彼の胸元を、無意識に掴んでいた。彼の大きな手が、私の後頭部を支えるように添えられ、口づけはいっそう深くなる。くちゅ♡くちゅ♡と濡れた音が、静かな寝室にやけに大きく響いた。

長い口づけからようやく解放されたとき、私の唇のあいだから、銀色の糸がつうつ♡と引いた。息が上がっている。頭の芯が、熱く痺れていた。

ヴィルフリートの指が、私の寝衣の合わせ目にかかった。

はらり、と布が肩から滑り落ちる。燭台の灯りの下に、私の素肌が晒された。彼の視線が、その肌の上をゆっくりと這っていく。見られている、という意識だけで、肌がじわじわと熱を帯び、私はとっさに胸を隠そうとした。

その手を、彼が押しとどめた。

「隠すな」

短く、けれど有無を言わせぬ声だった。

彼の手が、私の胸の膨らみに触れた。

大きな手のひらが、やわらかな肉を下から掬い上げるように包み込む。むにゅ♡と形が変わって、私は小さく息を呑んだ。彼の指が、ゆっくりと揉み込み始める。指の腹が肉に沈み、押し返され、また沈む。そのたびに、胸の先端が、彼の手のひらに擦れて、じん♡と疼いた。

「あ……っ、ん……」

すでに固く尖りはじめていた乳首を、彼の指先が、ふいに掠めた。ぴくん♡と身体が跳ねた。

「ここか」

彼は呟くと、その小さな突起を、親指と人差し指で、つまみ上げた。くりくり♡と指の腹で転がされ、こりこり♡と押し潰される。そのたびに、鋭い快感が、胸の先から全身へと走り抜けていく。

「ひゃ……っ、ん、ああ……っ♡」

初めて、はつきりと甘い声が漏れた。

自分の口から出た声とは思えなかった。羞恥に頬が熱くなる。けれど、彼の指は止まらなかった。片方を指で捌りながら、もう片方の乳首には、彼が顔を寄せていく。

濡れた舌が、ぬるり♡と乳首に絡みついた。

「あぁっ♡」

ちゅう♡と音を立てて吸い上げられ、舌先で、ころころ♡と転がされる。固くなった乳輪ごと、口に含まれて、ちゅぱ♡ちゅぱ♡としやぶられる。

指で潰されるのとはまるで違う、熱くて濡れた刺激に、私の腰が、勝手に
もじもじと揺れた。

ちゅぱッ♡、ちゅうっ♡、れろっ♡、ちゅくっ♡、こりっ♡、くりくり
っ♡

「ふぁ……っ、あ、んっ♡そこ、やぁ……っ♡」

胸の先から、甘い痺れが、絶え間なく送り込まれてくる。指で、舌で、
左右の乳首を別々に責められて、私はもう、声を抑えることができなかった。

彼の唇が、私の胸の谷間に落ちた。やわらかな膨らみの内側を、舌先が、
つつっ♡と舐め上げる。汗ばみはじめた肌を、彼が味わうように吸い、ち
りっとした痕を、いくつも散らしていく。そのひとつひとつが、私のもの

だという印のようで、なぜか胸が締めつけられた。

彼の手は、急がなかった。まるで、壊れ物に触れるように、ひとつひとつの動作を慎重に運んでいく。それが、かえって私の身体を、じわじわと追い詰めていった。次にどこへ触れられるのかと、肌が勝手に身構えてしまふ。期待と、羞恥と、緊張とが、ないまぜになって、全身を熱く火照らせていく。

そのときだった。

彼の指先と、私の肌が触れ合うところから、淡い光が、ふわりと立ちのぼった。

青白い、けれど書斎で見たような荒々しさのない、やわらかな光の粒子。それが、彼の指から、私の肌へと、糸を引くように流れ込んでくる。触れ合った場所が、ほのかに温かい。

「これ……は……？」

「風呂でいるんだ」

ヴィルフリートの声が、わずかに掠れていた。

「お前に触れると……俺の魔力が、こうして、お前のなかへ……」

言いながら、彼は私の鎖骨に唇を落とした。肌の上を、光の粒子が、ちらちらと舞っている。その光が、私たちの輪郭を、薄く縁取っていた。

不思議な感覚だった。彼に触れられて生まれる快感と、肌を流れる光の温かさが、ひとつに溶け合っていく。これが、役目。これが、私にしかできないこと。そう思うと、羞恥のなかに、奇妙な誇らしさのようなものが、混じり込んできた。

彼の手が、私の脇腹を撫で下ろし、腰の括れをなぞり、太腿へと滑っていく。指の腹が、内腿のやわらかな部分を、すりすり♡と撫で上げる。そ

のたびに、脚の付け根の奥が、じんじん♡と疼いて、何かが溢れそうになるのを、私は懸命にこらえていた。

「あ……っ、ん、ヴィル、フリート、様……っ♡」

太腿の内側を、彼の指が、ゆっくりと往復する。すりっ♡すりっ♡と肌をなぞるたびに、その指先は、少しずつ、けれど確実に、付け根のほうへと近づいていく。焦らされているのか、それとも彼自身が確かめているのか。じれったさに、私の腰が、無意識に揺れた。脚の奥が、もう、しとどに濡れているのが、自分でもわかった。下着の薄い布が、肌に貼りつくほどに。

彼の指が、その濡れた布の上を、っ♡と撫でた。

「ひゃっ……っ♡」

ぴくん♡と腰が跳ねる。たった一度、触れられたただけなのに、ぞくぞく

とした快感が、腰の奥から這い上がってきた。彼の指は、布越しに、私の割れ目を、上下に、ゆっくりとなぞり始めた。くちゅ♡と、湿った音が聞こえた。

「あ……っ、あ、んっ♡や、音、が……っ♡」

「もう、こんなに濡れている」

彼の声に、わずかな熱が滲んだ。

布をずらした彼の指が、直に、私の秘所へと触れた。

ぬるり♡と、溢れた愛液が、彼の指を濡らす。指の腹が、割れ目を、つぶ♡ぬぶ♡となぞり上げ、上のほうにある小さな粒を、ふいに掠めた。

「あぁんっ♡」

跳ねるような声が出た。そこは、これまで触れられたどこよりも、鋭く快感を伝えてくる場所だった。彼の指先は、その敏感な突起を、くりくり

♡と円を描くように転がし始める。最初は包皮のなかに埋もれていたそれが、刺激を受けるたびに、じわじわと膨らんで、ぷっくり♡と頭をもたげてくる。

「ひゃ、あ、あっ♡そこっ、そこ、だめ……っ♡」

膝が、勝手にがくがくと震えた。腰の奥から、熱いものが、とろとろ♡と溢れ出してくるのがわかる。彼の指は、ぬめりを纏って、いっそうなめらかに、その粒を嬲り続けた。くちゅ♡くちゅ♡と、濡れた音が、止まらない。

ぬちゅっ♡、くちゅくちゅっ♡、ぷちゅっ♡、ころころっ♡、ぬるっ♡、くりっ♡

彼の指の動きが、ほんのわずか、速くなった。けれどそれでも、決して乱暴にはならない。あくまで抑えられた、律された動き。氷の宰相の手は、

自らの力を恐れる癖が、こんなところにまで沁みついているのだと、朦朧とした頭の隅で、私は思った。その慎重さが、もどかしくて、けれど、たまらなく優しかった。

肌の上を流れる光が、私の昂ぶりに呼応するように、ちらちらと瞬きを増していった。彼の指から伝わる魔力の温かさと、与えられる快感とが、もう、区別がつかないほどに溶け合っている。

「んっ♡ あ、あ……っ、なに、か……っ、来ちゃ……っ♡」

迫り上がってきた何かに、私は怯えて、彼の腕にしがみついた。

燭台の炎が、ゆらりと揺れた。

肌の上の光が、また少し、濃くなった気がした。

迫り上がってきた何かに、私はとうとう呑み込まれた。

「ひゃ、あ、あぁ……っ♡♡」

腰の奥で弾けた快感が、全身を、びくびく♡と痙攣させた。爪先が、シートを蹴るようにぴん♡と伸びる。頭の芯が真っ白に灼けて、しばらく、息もできなかつた。彼の指の上で、私のそこが、ひくひく♡と収縮しているのが、自分でもわかつた。

初めての絶頂だつた。

力の抜けた身体を、彼の腕が、そっと支えてくれた。荒い呼吸を繰り返す私の額に、汗で張りついた髪を、彼の指が、やさしく払う。

「上手にイケたな」

その声に、からかうような響きはなかつた。むしろ、どこか満足げで、私の達したことを、確かめるような声だつた。

彼が、身を起こした。

燭台の灯りの下で、彼が、自らの衣服に手をかける。はだけた胸元から、引き締まった身体が現れた。氷の宰相という異名からは想像もつかない、確かに血の通った、男の身体だった。そして、その下腹で、すでに昂ぶってきたものが、私を待ち受けているのが見えて、私は思わず、息を呑んだ。